

## いのちの実感

私が社会人になったばかりのある雨の日、高校3年生の弟が、生まれたばかりの捨て猫を学校帰りに拾ってきました。鳴く声が弱々しく、しばらく家で面倒をみることにしました。やがて猫は元気になり、そのまま家族の一員として飼うことにしました。名前は「ミィ」になりました。この後、ミィは15年の生涯を送ることになるのですが、その間に私は結婚し家族が増えました。

息子は幼いころから、ミィのことが大好きでした。ミィは毛の長い猫でしたので、毎日のブラッシングは欠かせません。当初は大人がしていましたが、やがて息子も「やってみたい」と言いだし、一緒にブラッシングをするようになりました。ミィは気持ちがいいのか、動かずにされるがままの状態になります。ミィを仰向けにして毛をときながら、息子は、

「お父さん、ミィちゃんのおなかはあったかいよ。心臓のドキドキが手に伝わってくるよ。」  
と言いました。ブラッシングは、息子とミィの楽しい触れ合いの時間になっていきました。

ある日、玄関の閉め忘れでミィが「脱走」したことがありました。ミィを見つけた私が近づくと、ミィは素早く逃げます。何度も捕まえようとしても逃げられてしまい、この追いかけては私の負けでした。根負けした私とは違い、息子は「ミィちゃん」と優しい声で呼びながら、庭のあちらこちらを探しつづけていました。暫くすると、息子はミィを抱きかかえていました。

「どうやってつかまえたの。」

「ミィがじっとしているところを見つけて、ぼくが近づいたら、仰向けにひっくり返ったのでつかめた。」

日頃の付き合いの差でしょうか。

息子が小学4年生の時、ミィは15歳になっていました。すっかり老衰して、何も食べなくなり動かずじっとしていました。息子は「ミィちゃん」と優しく声をかけながら背中をさすっていました。数日後、ミィは静かに息を引き取りました。

ミィの亡骸を家の畑の一角に埋葬し、合掌しました。大好きなミィが亡くなり、息子は号泣するかと思ったのですが、墓標をじっと見つめています。私は「死んじゃったね」と言えず、

「ミィちゃん長生きしたね。」  
と、声をかけました。すると、息子は、

「なんか悲しい。」  
と、ぽつりと言い、涙をこらえている様子でした。私は、言葉でうまく表現できないけれど、ミィの命を悼む「なんか悲しい」という言葉に、ミィの死を息子がしっかりと受け止めようとする思いがうかがえ、胸が熱くなりました。

「その気持ちで十分だよ。ミィちゃん喜んでるよ。」  
と言うと、息子は何も言わず私の体に身を預けてきました。